認知言語学から場の言語学へ

―新しい言語学のパラダイムの展開―

岡　智之

留学生センター

**１．はじめに**

　言語学の理論は変転が激しい。1930年代からの構造言語学（それ以前の比較言語学）、1950年代からの生成文法、そして、1980年代からの認知言語学の流れは、それぞれ前の時代の言語学理論のパラダイムを批判し、新しい言語学の流れを作ってきた[[1]](#endnote-1)。認知言語学の確立[[2]](#endnote-2)からもすでに30年が流れている。稿者自身は、1990年代から認知言語学の理論の下で、日本語文法や日本語教育、対照言語学などに応用する研究を行ってきたが、その中で、認知言語学での説明に違和感を覚えることが多くなってきた。そして、認知言語学を含め、欧米で生まれた主流の言語学理論は、いずれも近代西洋のパラダイムの域を脱していないのではないかと考えるようになった。例えば、主語を絶対必要とする言語の基準を、日本語のように主語を必ずしも必要としない言語に当てはめても、説明に無理が生じるというような問題である[[3]](#endnote-3)。冬、戸外に出て一番に発する「さむっ！」にはトラジェクターも主語もないであろう。確かにこの発話を発している話し手は存在するだろうが、焦点化されるトラジェクターでも主語でもない。このような単純な日本語の文でさえ、主語のある文（省略）として考えてしまうのは、主語＝主体のパラダイムにいかに多くの言語学者がとらわれているかを示す一例だろう。

本稿では、認知言語学を含め、主流の言語学理論のよって立つ、西洋近代的パラダイムを批判し、認知言語学の継承と乗り越えという立場から場の言語学のパラダイムを明らかにしていきたいと考える。

**２．旧来の言語学のパラダイムと場の言語学のパラダイム**

　認知言語学を含め、旧来の主流言語学のパラダイムはいずれも西洋近代科学、哲学の前提にある、「主客分離」、「個物と因果関係」のパラダイムに基づいている。それに対し、場の言語学のパラダイムは、「主客非分離」、「場における相互作用」のパラダイムに立っている。

　まず、「主客分離」とは、デカルトの「Cogito ergo sumわれ思う故にわれあり」の哲学にのっとっている。つまり、まず主体である「私」を絶対的立場として、対象である客体を認識する立場であり、主観と客観を完全に分ける立場である。自己と他者を分ける自他分離もその一種である。また、「個物と因果関係」のパラダイムとは、ニュートン力学以来の近代科学の前提に立つものである。認知言語学でも、球状の物体が次々とエネルギーを伝達していくというビリヤードボール・モデルを提唱し、この中から一区切りのエネルギー伝達の連鎖を取り出したものを「行為連鎖」（action chain）と呼ぶ。この認知モデルに基づいて「1つの物体が他の物体に接触することによって運動を引き起こし、その位置を変化させる」という他動的関係を典型的な事態としてみなしている。

それに対し、場の言語学の「主客非分離」とは、主体と客体、主観と客観、自己と他者は本来非分離であるという立場である。そして、「場における相互作用」のパラダイムとは、近代のニュートン力学に対し、現代科学が打ち出した「場の量子論」の立場に立つものである。すなわち、個々の物質がまず存在して、それが他の物質に影響を与えていくという立場ではなく、すべては場における個物同士、個物と場の間の相互作用によって成り立っているという立場である。物理学の世界だけではなく、複雑系である世界はすべて場における相互作用によって成り立っているのである。身近な例では、サッカーの試合は、個人のプレーだけでは成り立たない、チームでの選手同士の連携、リーダー、監督との相互作用、また敵対チームの状況、試合場の状況（ホームグラウンドか敵のグラウンドか）、天候などその場に置けるありとあらゆる要素、状況が絡み合って試合が進行し、勝敗が決まっていくのである。複雑系としての言語構造、言語使用の解明には、場の観点が必要である。

　2節ではまず、旧来の言語学と場の言語学のパラダイムの違いの概要を述べたが、3節では、場の言語学が継承すべき認知言語学の観点や道具立てを明らかにしたうえで、4節で、認知言語学のパラダイムの限界性と場の言語学のパラダイムで乗り越えという点について、「主客分離のパラダイム」を中心に詳しく論じていきたい。5節では、ナル的表現の文法から、「場における事態の生起」というスキーマを抽出し、フュシスの文法を提案する。6節では、言語習得論を中心に取り上げ、ここでの主客分離、自他分離的見方に対し、自他の相互作用によって意味が生み出されるという最近の質的心理学などのパラダイムと研究方法について言及しながら、場の言語学の研究法の模索を行っていきたい。おわりに、場の言語学の貢献と今後の課題について述べる。

**３．認知言語学の継承すべき観点、道具立て**

　認知言語学は、生成文法のパラダイムの批判から生まれた理論的立場である。そこで場の言語学にも通底し、継承していくべき観点、道具立てについてまず明らかにしていきたい。

　まず、認知意味論の理論的基礎付けであるLakoff and Johnson(1999)であげられている認知科学の3つの主要な発見―「身体化された心、認知的無意識、メタファー思考」は、場の言語学も継承すべきものである。

　「身体化された心」とは、デカルト哲学のように、心（理性）と身体を完全に切り離す立場ではなく、「心は本来身体化されている」というものであり、身体的経験が思考の基礎にあるという立場である（経験基盤主義）。この哲学的先駆者として、ジョン＝デューイとメルロ＝ポンティをあげている。人間の概念は、身体、脳、特に感覚運動システムによって決定的に形作られている。色彩概念、基本レベル概念、空間関係概念（イメージ・スキーマなど）がそのことを証明している。場の言語学においても、身体的経験が思考の基礎にあるということを承認する。ただし、身体を主体としてのみ捉えるなら主体の思考の枠内である。場の言語学では、身体も場として捉え、経験は主体・客体以前の純粋経験として捉える立場から、身体的経験を考える。

　次に、「認知的無意識」とは、認知（感覚・知覚・感情・思考など）の大部分は無意識なものであるという。意識的思考は氷山の一角であり、すべての思考の95%が無意識下にある。そして、この無意識的概念システムはメタファー的であるという。ただ、認知科学は自他分離の立場なので、認知的無意識は、各個体の脳の働きや神経構造、感覚運動システムだけに局限されて、他の個体とのつながりが見えない。

　「メタファー思考」とは、抽象的な思考、概念のほとんどがメタファー的ということであり、メタファーなしに人間が複雑な思考をすることはできないという。場の言語学では、メタファー思考とは述語的同一性に基づいた述語論理に基づいていると考える。述語論理とは、場所＝述語から出発し、その場所において包み込まれる主体や客体（存在者）について論じる論理である（城戸2003）。たとえば、「女性は太陽である」というメタファーは、「太陽は輝いている」「女性は輝いている」という述語的同一性に基づいている。これが述語論理である。主体＝主語から出発し、述語を主語の属性として論じる、主語論理からすれば、「女性は太陽である」という言明は矛盾している。認知言語学では、「メタファーは異なる領域間の写像」というが、それだけでは、なぜその写像が行われるかという動機付けも含めた説明としては不足である。メタファーや比喩の理解には、述語論理の理解が必要なのである[[4]](#endnote-4)。

　認知言語学から継承すべき道具立てとしては、「図と地」の分化、参照点構造、イメージ・スキーマなどがあげられる。

　認知言語学がその基盤として援用する心理学の概念に「図と地」がある。私たちが、物事を知覚する際に最も基本的な認知能力の1つに、図と地の分化の能力があると考えられる。「図」（Figure: 前景）とはあるものに目を向けたとき、目立つもの、際立つもの、図柄として認定するものであり、その背景としてみなすものを「地」（ground）という。この図は輪郭のある「モノ」であり、地は「場所」であると言ってもいいだろう。図と地の分化というのも、結局、モノと場所を区別して知覚する認知能力によっていると考えられる。そもそも、人間の視覚的認識ルートには、「モノ」を認識するルートと「場所」を認識するルートが異なり、モノと場所を識別できることが、図と地の反転を可能にしていると言える（城戸2003:106）。この場所とモノの分化によって、認識が可能になり、また存在が認知され、推論も可能になるのである。認識論、存在論、論理学の基礎にあるのは、この場所とモノの分化の認知能力なのである。

　ラネカーが提唱する「参照点構造」は、「あるものXを指すのにまず隣接するYを指し、そこからXにアクセスするメカニズムを言う。このとき、Yを参照点と呼び、Xをターゲットと呼ぶ。」（菅井2003）。参照点構造の例としては、所有表現があり、dog’s tail「犬の尾」において、まず参照点としてのdog （犬）にアクセスし、tail（尾）というターゲットにアクセスするプロセスである。ここで重要なことは、犬と尾は、全体と部分関係になっており、犬という領域を支配領域あるいは探索領域として尾を指し示すという構造になっている点である。場の言語学では、参照点能力というのは、場所を基盤にしてモノを認知する人間の基本的能力として位置づけられる。日本語の「XハY」構文もこの参照点構造として、ハは概念的場として位置づけられる（岡2013）。たとえば、「太郎は？」の「は」は、「太郎」をめぐる概念の場を形成する。その場の中で、「太郎」を参照点に「学生である」「ご飯を食べている」「頭がよい」などの述語が結び付けられる構造である。

「イメージ・スキーマ」とは、「言葉の形成と概念化に先立って存在する心的表象に関わる認知能力の１つ。…種々の身体経験をもとに形成されたイメージを、より高次に抽象化・構造化し、拡張を動機づける規範となるような知識形態を言う」（辻2013）。代表的なイメージ・スキーマである「容器のスキーマ」は、「ある個体がある場所にある（いる）」あるいは、「そこに入る、出る」といった知識構造の型であり、様々な言語表現（inなどの前置詞、「に」「で」などの助詞、「彼女は恋愛中」などの状態表現へのメタファー）に、「容器のスキーマ」が反映されている。「容器」は狭い意味の「場所」であると考えられる[[5]](#endnote-5)。

　認知科学で言う「フレーム」は、「ある概念を理解するのに前提となるような知識構造」のことである。たとえば、「ウェイター」という概念は「レストラン」に関する我々の一般的知識を特徴づける「レストラン・フレーム」によって意味づけられ、理解されるものである。このような「フレーム」というのも場所の一種と考えられるが、井出・櫻井（2013）では、「フレームが人間の認識の範囲で捉える枠組みであるのに対し、場は認識を超える枠組みである。人間は場の中に埋め込まれていると捉える考え方であり、無意識的な領域も含んでいる。このようにフレームとは次元を異にしている。」と、場とフレームの違いを説明している。

　このように、認知言語学の身体性、経験基盤主義、メタファー思考、認知的無意識などは、場の言語学とも通底する考え方であり、「図と地」の分化や参照点構造、イメージ・スキーマなどは、場の言語学でも応用しうる道具立てと考えられる。認知言語学と場の言語学は多くの点で、共通した観点を共有し、補完しあいながら発展する可能性を持っている。

　4節では、認知言語学と場の言語学のパラダイムの最大の違いとしての主客分離のパラダイムの問題性を取り上げる。

**４．主客分離のパラダイム―言語における「主観性」の問題**

　認知言語学は、生成文法がよって立つデカルト主義（非身体性、客観主義）に対する批判を行っている。人間の意味づけや言語使用と関わりなく、言語能力が生得的に存在し、その言語能力を解明していくことを目的とするのが生成文法である。それに対し、認知言語学は、こうした客観主義的言語学のパラダイムに異議を唱え、認知主体の事態把握によって言語の意味が生み出されるという基本的パラダイムを対置し、認知主体を言語学に復権させたという点で、大きなパラダイム転換を成し遂げたといえるだろう。自らも「主観性の言語学」と称している。しかし、「客観主義」に対して「主観」「主体」を強調することは、そもそも「主客分離」を前提にした立場ではないだろうか。主観性の強調は、独我論や主観主義に陥ってしまう危険性もある。主客分離の立場を乗り越えられなければ、客観主義のアンチテーゼは、主観主義に陥るしかないのである[[6]](#endnote-6)。

 まず、認知文法を提唱したラネカーの主観性と視点配列について述べ、そこにある主客分離のパラダイムを批判的に検討する。

**4.1 主観性と視点配列**

ラネカーの認知文法では、主体が、概念化の対象である客体的な事態を、外から客観的に把握する場合と、その事態を構成する一部となってその事態を把握する場合がある。これをそれぞれ最適視点配列（optimal viewing arrangement）と自己中心的視点配列（egocentric viewing arrangement）とよんでいる[[7]](#endnote-7)。

図1で、MSとは概念化の対象となっているすべてのものを含む最大領域（Maximal Scope）、ISはこのMSの中でプロファイルされているものを最も直接的に特徴づけている直接領域（Immediate Scope）を表している。

図1の最適視点配列は、概念化者（C）が事態の外から自らが参与者となっていない事態（O）を把握するもので、（1）のような例文があげられている。

（１）They are approaching Tokyo.

（彼らは東京に近づいている。）

 MS

　　　　　　　　MS

 **図1　最適視点配列**

図2の自己中心的視点配列は、主体（C）が、事態の中に入ってその事態（O）を把握するもので、（2）のような例文があげられている。ここでは、主体は自らの移動によってこの事態が起こっているにもかかわらず、＜東京の移動＞という事態（＜見え＞の変化）を認知する主体としての役割を担っている、としている。

（２）Tokyo is approaching.（東京が近づいている。）

 IS

 is

MS

図2　自己中心的視点配列

ここで、一つの問題は、ラネカーが英語などに特徴的な図1のような視点配列を標準的なものとみており、図2のような捉え方を自己中心的視点としていることである。この点について、山梨（2009:83）は次のように言っている。

Langacker(1985)は、英語のような言語に特徴的な客観的な視点構成を「標準的」としているが、これは英語をはじめとする欧米言語の自己中心的な主観を反映している視点ということもできる。（中略）言語類型論的な立場から見るならば、「標準的」という言葉は、日本語にも欧米語にも相対的に適用することが可能である。この立場から見るならば、いわゆる「客観的」視点構成が、英語のような欧米語では「標準的」であり、「主観的」な視点構成が、日本語のような言語では「標準的」であるということも可能である。この言語類型論的な立場は、言語の標準性、典型性などの判断が、言語現象を分析する研究者の主観性（ないしは主観的視点）に多分に左右されることを示している。

一方、澤田（2011:xxii）では、「Langackerの言う「最適な視覚構図」とは、科学的研究に必要とされる一種の「理念化」（idealization）・抽象化の産物であり、このタイプの視覚構図が英語で標準的・一般的であるという意味ではない」としている。よしんば、英語に標準的な見方ではないとしても、近代科学での典型的なものの見方と言っているかぎり、これはやはり、近代西洋の「主客分離」のパラダイムに立つものと言わなければならない。

また、視点配列としては、次のようなものもありうる。

図3は、主体（C）が、事態の外から自らが参与者となっている事態（O）を把握するもので、(3)のような例文が挙げられている。

（３）We are approaching Tokyo.

（？私たちは東京に近づいている。）

　　　　　　MS

　MS

**図3　自己の客体化**

図4では、主体（C）が、事態が起こる場を形成し、その上で事態（O）を把握するとして、(4)のような例文を挙げている。

（４）The island came into view.　 （島が視界に入った。）

　　　　　　　　　MS

**図4 事態が起こる場を形成**

(3)の例文は英語であげられているが、日本語では通常このような表現は自然ではないと思われる。例えば、新幹線に乗っていて、東京に近づいているという状況では、英語では「We are arriving at Tokyo station.」（私たちは東京駅に到着しつつあります）と言うが、日本語では、「（この列車は）東京に近づいています」とか「東京が近づいています」という表現はあまりせず、「まもなく東京です」という言い方である。このような表現に対する認知図式は実は、図2にも当てはまらないのである。図4のような視点は、いわゆる存在文や現象描写文の図式に当てはまるのではないか。（4.4参照）

　以上のような認知言語学で提案される視点配列を、場の観点から「場外在的観点」「場内在的・事態内在的観点」「場内在的・事態外在的観点」と捉え直すことができる。「場外在的観点」は、図1に該当するもので、主体が「今、ここの場」から離れて客体を観察する立場であり、いわゆる「神の視点」[[8]](#endnote-8)である。例えば、「地球は太陽の周りを周っている」ということは、科学的真理とみなされているが、実はこれをだれ一人として見た人はいないのである。人間が太陽系外での視点に立ったと仮定して理論的に述べた言明なのである。これこそ主客分離の極致である。これを「最適視点配列」としていること自体が、近代科学・哲学のパラダイムにたった偏見である。このような科学的言表以外にも、日常的に「場外在的観点」を使っているのは、図3の自己を客体化した場合である。言語的には、「私」が言語化される言表である。必ず、「I」などの人称代名詞を言語化しなければならない英語などの言語の観点は、「場外在的観点」である。日本語でも「私」を言語化すればこの図式になるが、「私」が言語化されない場合が多い（「富士山が見える！」などの例）というのは、単なる「省略」ではなく、日本語では、「場外在的観点」ではなく、「場内在的観点」に立っているからと説明される。

日本語では、現象を観察する視点としてよく言語化されるのは、「場内在的・事態外在的観点」であり、図5に該当する（図4とも一致するだろう）。これは、主体が「今、ここの場」にいて、そこから事態を描写する観点である。日本語でいう現象描写文（「雨が降っている」）はこの観点からの表現である。ここでは認知主体が、「雨が降っている」という事態の中で（濡れながら）言っているのではないという意味で、事態外在的である。

雨が降ってる

**図５　場内在的事態外在的**

**図６　場内在的事態内在的**

「場内在的・事態内在的」観点とは、認知主体が「今、ここの場」にあり、かつ事態の中にある（事態に関与している）という見方である。知覚文「富士山が見える」は、認知主体の視界の中で「事態が出現」していると捉えられる（図6に該当。ここでは、あえて、認知主体を図の中に入れていない）。さらに、新幹線の中で東京に近づいてきたことを「まもなく東京です」というのは、この観点の極致である。主体も客体もなく、乗客、乗員も新幹線もその場の状況が全て「東京」という場になるということである。「東京」という場の出現を述べた表現ということになる。

次に、ラネカーの言う「主体化」（subjectification）について検討する。

(5) Vanessa is sitting across the table from Veronika.

（最適観察構図）

(6) Vanessa is sitting across the table from me.

（「主体化」。自己の客体化。）

(7) Vanessa is sitting across the table.

（最大の「主体化」。自己中心的観察構図）

私

V

  **図7　Vは私から見て机の向こうに座っている**

**図8 Vは机の向こうに座っている**

おなじみのラネカーの主体化の例を見てみると、(5)の「ベロニカから見てバネッサがテーブルの向こうに座っている」という、客観的な見方をラネカーは「最適」な見方といい、(6)の「私から見てバネッサがテーブルの向こうに座っている」（図７）という、客体的な事態に主体（私）が入り込む表現として「主体化」となり、(7)の「バネッサがテーブルの向こうに座っている」（図8[[9]](#endnote-9)）というように、自己がゼロとなり、完全に事態の中に入り込んでしまうことを、最大の主体化であり、これを「自己中心的」な見方といっている。つまり、客観的見方が標準であり、そこからの逸脱として「主体化」を言っているのである。

池上（2004）では、日本語では、むしろ、「主観的事態把握」がプロトタイプであり、そこから「客観的事態把握」が派生されるという枠組みの修正をしているが、依然、「主観的」＝「自己中心的」という見方はそのまま受け継がれている。自己（「私」）がゼロ化されたところで「自己中心的」になるというのも、考えてみればおかしな話である。これは、「私」が言語化されていなくても、主体（「主語」）は厳然と存在するという、主体（主語）の論理からする思い込みではないだろうか。「私」が言語化されない「自己のゼロ化」とは、主体としての自己が消失し、「場」としての自己に転化するということではないだろうか。

最近では、生態学的心理学の知見が認知言語学には取り入れられており、それ自体、独我論的な立場を超える試みであると評価できる（本多2005[[10]](#endnote-10)）。ここでは「自己」が言語的に表れない（自己のゼロ化）ことを「エコロジカルな自己」と言うが、やはりあくまで「自己」＝「主体」は強固に存在している。生態学的自己とか環境論的自己というのもやはり自己＝主体であって、そこを乗り越えていかなければならないのである。「環境にやさしい」というエコロジーも所詮、人間主体を優位に見るパラダイムなのである。

次節では、ラネカーの主体化の議論を受けた池上の「主観的把握と客観的把握」という事態把握の仕方と、「主観的＝自己中心的」という見方についてさらに批判的に検討する。

**4.2 主観的把握と客観的把握再考**

まずは、主観的把握と客観的把握の定義を確認しておく。池上(2011)では「事態把握の2つの基本類型」を次のように定義している。すなわち、主観的把握は「話者が問題の事態の中に自らを置き、その事態の当事者として体験的に把握する」、一方、客観的把握は「話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする」ということで、それを言い換えるとそれぞれ、主客合一か主客対立に当るという。そして、日本語は主観的把握をする傾向が強い言語、英語は客観的把握をする傾向が強い言語としている。

ここで問題は、主観的把握とは、事態の体験的把握であり、自己中心的であるのかということである。まず、おなじみの『雪国』の冒頭の文を再検討することによってそのことを検証する。

（8）国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

（9）The train came out from the long tunnel into the snow country.

 （英語の直訳：列車が長いトンネルから雪国に出てきた。）

（10）（列車が/ 私が/ 島村が/ 私たちが） 国境の長いトンネルを抜けると、 そこは　雪国であった。

　　（8）は、列車に乗っている主人公の視点から述べたものであり、個人の主観的体験を述べたものであると言われる。果たしてそうだろうか。試しに、（10）のように、誰が（何が）トンネルを抜けたのかということを明示してみよう。「列車が/ 私が/ 島村が/ 私たちが」どれを入れても、「…抜けると」は成り立つ。つまり、主体はなんでもいいということである。それでは、この文章の主節「雪国であった」の「主語」はなんであろうか。それは個人的主体ではなく、「そこは、雪国であった」としか言えない、その場の情景を述べたものというしかないのである。すなわち、語り手個人の体験を述べたものというより、語り手であれ、読み手であれ、自己の場に起こる事態がありのままにあらわされたものと言えるのではないだろうか[[11]](#endnote-11)。現象描写文とは本来そのようなものであり、誰が見てもそのような情景である、個人の主観的な、あるいは自己中心的な描写などではないということである。ここでは、主体と客体は分離していない。いわば、主客非分離である。また、主体がどうそれを捉えているかというより、場の情景が自己の場に映された「場内在的」な描写である。(図9)

**図9　場内在的描写**

一方（9）の英語の翻訳文は、全能の語り手が、場の外から事態を描く仕方であり、「場外在的描写」である。

**図10　場外在的描写**

次に、（11）（12）の対比では、日本語は、主体は言語化されず、「場所」がどこかを問うているのに対し、英語では、主体（I）を言語化して、場から出た観念的な自己（認知主体）が、その「私」がどこかを問うている。この対比では、日本語は「場中心的」であり、英語は「自己中心的」である。

（11）ここはどこですか？

（12）Where am I ? （私はどこですか）

?

**図11　ここはどこですか？**

 場から出た観念的自己

I

　　　　　　**図12　Where am I?**

ここで日本語では「私」が言語化されないという意味について考えてみる。認知言語学では、「私」が言語化されず、ゼロ化されることを「主体化」といい、このような表現を「主体的（主観的）な表現」と言っている。しかし、先ほど見たように、これは主客非分離的表現なのであって、ここで主客分離を前提にした「主観的、主体的」という用語を使うのは適切ではないと考える。

　そして、主客非分離的観点においては、「私」は、「主体」ではなく、「場所」になっていると考える。

（13）雷鳴が聞こえる。

（14）稲妻が見える

（13）（14）のような表現は、英語などでは「I can hear a thunder.(私は雷鳴を聞く)」「I can see a lightning.(私は稲妻を見る)」のように「私」（I）を言語化せずには表現できないであろう。日本語では、「私」は必要ないのである[[12]](#endnote-12)。あえて言語化すれば「私には雷鳴が聞こえる」のように対比的ニュアンスになってしまう。また、「＊私が稲妻が聞こえる」のように「私」は主格（ガ格）で現れるのではなく、与格（ニ格）で現れるのである。すなわち、「私において、雷鳴（稲妻）という現象が起こっている」ということである。「私」は事態を起こしたり、認識したりする「主体」というより、私の意識において、すべてが映し出される「場所」として捉えられているのである[[13]](#endnote-13)。

西田幾多郎の言う「純粋経験」[[14]](#endnote-14)というのは本来、言語化しえないものであるが、日本語では、純粋経験に近い言語化が可能だと言えるのではないか。そしてこの純粋経験は、主観的な、自己中心的な体験というようなものでは全くなく、主客分離以前の人間の根源的な経験である。純粋経験は、本当のリアルな自然の生の世界に触れることである。すなわち、5節で述べるフュシスの世界に入ることである（池田・福岡2017）

次に、「主観的把握」を事態の「体験的把握」と定義すること、この「体験」を「自己中心的」であると言ってしまうことの問題性について検討する。

　池上(2004)では、「＜主観的事態把握＞とは、＜自己中心的＞な視点で事態が＜体験＞として把握されること」と定義しており、「ここで言う＜自己中心的＞という限定は、事態把握の仕方が＜自己＞対＜他者＞という構図に基づいていること」としている。また、体験とは、「発話の主体の中において生じる＜私的＞な過程であり、本人自身によってのみ直接＜接近可能＞なものであるが故に、すぐれた意味で＜主観的＞な出来事と言えよう。」としている。が、はたしてそうだろうか。例えば、「寒い」という「事態」が、場のほとんどの人の共有事項とされている状況で、「寒い」という「体験」が、それ自体「主観的」とか「自己中心的」と言えるだろうか。また、池上(2004:36)では、「人間の言語の文のもっとも基本的な形式は、極限的な＜主観化＞を経た文－具体的には、国語学で言う＜現象文＞のように、話し手が事態を＜体験＞として提示する文―ということになろう。＜現象文＞の意味は発話の主体自身の直接的な＜体験＞と関わるものであり、それ故に、もっともすぐれた意味で＜主観的＞なものである。」とし、「雨が降っている」などの現象文は、事態を体験として提示したものとして、極限的な主観化を経た文としているが、はたしてそうだろうか。

現象文を最初に定義した三尾砂（2003:64）は「現象文は現象をありのまま、そのままをうつしたものである。判断の加工をほどこさないで、感官を通じて心にうつったままを、そのまま表現した文である。現象と表現との間に何のすきまもない。現象と表現の間に話し手の主観がまったくはいりこまないのであるから、そこには主観の責任問題はない。」としている。主観を挟まず、事態を見たままありのままに述べた文であって、むしろ、事態の客観的描写ともいえる。池上氏は、現象描写文は「驚き」を述べるモノローグであるから「主観的」であるとされるが、他者に対して「雨が降っている」ことを知らせる伝達的な機能で使われることもあるわけであるから、すべて独り言であり、すべてが主観的とはいえないだろう。

場の観点から言うと、現象文は、場内在的であるが、認知主体が場の中にありながら、事態とは一定離れてそれを見ているという意味で、客観的でもあるという面を持っている。「寒い」などのように事態の中に完全に主体が没入している場合と違うものとして考えておかなければならない。自分は部屋にいて窓越しに「雨が降っている」ということに気づいたという場合は、認知主体の視界という場において、事態が起こっているのだが、雨という事態に直接的に影響を受けるわけでもなく、事態から少し離れた立場からそれを眺めているように感じられる。認知文法の用語で言うと、話者の視界が「最大スコープ」で、「雨が降っている」という事態が起こっている場所は「直接スコープ」ということになるだろう。場の観点から言うと、このような現象文は、「場内在的」であると同時に、「事態外在的」といえるのではないか。この点、場と事態が一体になった「寒い」などのような発話と異なると考えられる。「主観的把握」は、事態の中に認知主体が入り込み、事態を体験的に把握するものとされるが、「雨が降っている」という現象文が発せられる体験とは、事態の中に入り込んでいるのではない。このような現象文を主観的把握といってしまうのは誤りである。その区別のためにも、「事態の中にある」ことと「場の中にある」ことを分ける必要があるのである。

　池上（2007:327,334）では、環境論的自己>から<場所>としての自己[[15]](#endnote-15)という概念が提起されていることは、＜場所の哲学＞につながる注目すべき指摘である。しかし、それが「主観的把握」「客観的把握」という「主客対立」の図式に逆戻りしてしまっていることは惜しまれる。これほど、主客分離のパラダイムの影響力は強いのである。

次節では、さらに日本語の「主観性」の指標として挙げられる内的状態述語の人称制限が、場の観点からすれば、疑似問題であることを指摘する。

**4.3 内的状態述語の人称制限と主観性**

池上（2005）では、いわゆる内的状態述語の人称制限を日本語の主観性の指標としている。「寒い」などの内的状態述語は、一人称主語でしか使えない、2，3人称では非文になるからということらしい。しかし、日本語ではそもそも人称詞（主語）をつけないのが自然なのであって、「私は寒い」とはふつう言わない。日本語は述語だけで文が成り立つのである。人称詞を使わない言語に、そもそも人称制限なる議論が成り立つのであろうか。

日：1人称：?私は寒い。/さむっ！/ 寒いよ。

2人称：??あなたは寒い。/ 寒い？ 3人称：＊彼は寒い。

　英：①I’m cold. ②You are cold. ③ He is cold.

　金谷（2004:60）では、日本語にはそもそも英語などのように「I」一つで言える人称代名詞は存在しないのであって、場面と相手に応じて、言い方が変わる人称名詞に過ぎないとしている。そして、人称制限なるものは、視点論で解釈できるとしている。すなわち、「神の視点」をとる英語では、「I」も「you」も「s/he」もすべての人称が、状況から引き離された高みから見下ろされる。それゆえ、2，3人称も同じく「内的状態述語」が使える。一方、「虫の視点」をとる日本語では、話者は状況の中に入り込んでいる。そうすると1人称である「私」は自分には見えないから客体化することができない。状況の中で、見えない話者は自分自身を客体化できず、常に聞き手との関係で、「私」「僕」「俺」「先生」「パパ」などに変化する。ここでは、人称による動詞活用などはないのであって、人称論自体が日本語では成り立たないのである。金谷の視点論は、場の観点からいえば、「場外在的観点」と「場内在的観点」の相違と言い換えられであろう。

S/he

You

I

**図13　「神の視点」**

(あなた？)

(私？)

(彼/彼女？)

**図14　「虫の視点」**

寒いね

**図15 「寒いね」**

I’m cold.

Are you cold?

**図16　「I’m cold.」**

そもそも、「私は寒い」とか「あなたは寒い」という表現を使わない日本語では人称制限という用語を使うのは適切ではないだろう。日常会話では、たとえば、（15）(a)のように、「今日は寒いね」と話し手が語れば、聞き手は「寒いね」と答える。ここでは、同じ場での「寒い」という体験を共有していることを確認しているわけである。「寒い」という体験は、話者だけに感覚可能な主観的な体験ではなく、場の中で自他非分離的に共有されている体験である[[16]](#endnote-16)。(b)のように、「私」「あなた」が入る会話もありえるが、冷房が効きすぎた部屋で、隣の人に確認しているような会話だろうか。「私」「あなた」を対比的に言うような文脈を考えなければならない。

（15）（戸外で誰かと会った時の対話）

　　(a) 話し手：　今日は寒いね。　聞き手：寒いね。

(b) 「私は寒い。あなたは寒い？」「別に」

　「寒い」「暑い」というような体感だけではなく、感情も私秘的ではなく、同じ場において共有できるものであることは、日常生活で経験しうることである。例えば、サッカーの試合で勝った時、チームメイトはお互いに「うれしいね」「うれしいね」といい合っている。ここに自他の分離はないであろう。また、応援している人たちも共に「うれしい」のであり、この際「私は嬉しい」「あなたは嬉しい」ということ自体がナンセンスだろう。

　ミラーニューロンの議論[[17]](#endnote-17)を持ち出すまでもなく、人間は本来他人が痛がっているとき、顔をしかめ、幸福そうにしているとき、同じく微笑むのである。感情表現の人称制限の議論は、人間が自分の感覚・感情のみしか感じられない、他人の感覚・感情は感じられないことを前提としている[[18]](#endnote-18)。この前提は、自他分離のパラダイムであり、自他分離を前提とした近代パラダイムでは、他人の感情はいつまでたっても理解しえない謎でしかないのである（「他者理解のアポリア」）。

ここで、清水（2003）の場の理論（「自己の卵モデル」）を援用して、場の感情感覚モデルを提唱してみたい。清水（2003:44-50）の自己の卵モデルでは、自己は卵のように局在的性質をもつ「黄身」（局在的自己）と遍在的性質をもつ「白身」（遍在的自己）の二領域的構造を持っている。黄身には局在的な自律性を担う部分として中核があり、黄身のそれ以外の部分は局在場と見なす。場所における人間は、「器」に割って入れられた卵に相当する。器に広がった白身が「場」に相当する。人間の集まりの状態は、一つの「器」に多くの卵を割って入れた状態に相当する。器の中では、黄身は互いに分かれて局在するが、白身は空間的に広がって互いに接触し、互いに混じり合って、一つの全体的な秩序状態を生成し、複数の黄身のあいだでの場の共有がおきる。そして集団には、多くの「我」（独立した卵）という意識に代わって、「われわれ」（白身を共有した卵）という意識が生まれる、という。

場所的自己（白身）

 局在的自己（黄身）

**図17　自己の卵モデル**

　　　　　自己　　　　　　　　他者

無意識下：根源的な場

　　　　　　　　　　（意識下）

**図18　氷山モデル**

清水の場の理論では、感情・感覚の共有ということは述べられてはいないが、個別的な感情・感覚は、「局在的自己」（黄身）の「局在場」（身体場あるいは情意場）で起こっているのではないかと考える[[19]](#endnote-19)。さらに局在的自己を取り囲む「遍在的自己」（場所的領域：白身）があり、同じ場において、複数の卵が相互作用し、場が共有されることによって（白身が融合するように）、複数の個人が感情・感覚を共有することができるということになる。更に本稿では、「氷山モデル」（図18）を提案する。ここでは、意識下の「自己」と「他者」は、無意識下の「根源的な場」ではつながっていると考える。日本語における感覚・感情・思考は、「私」という場所で起こっている出来事である。それは私秘的な「主観的」なものというより、場が共有されることによって、共有可能になる。いやそもそも根源的な場ではつながっているものなのである。

**4.4　3人称述語と現象描写文**

内的状態述語において、人称論を持ち出すのが適切でないと述べたが、内的状態述語の直接形は、3人称ではなぜ使えないかという疑問は残る。

(16) a. ＊太郎は寒い。 b. ＊彼はうれしい。

(17) a. 太郎は寒そうだ。 b. 彼は寒がっている。 c.彼はうれしそうだ。

いわゆる3人称というのは、コミュニケーションを行っている話し手、聞き手を含む発話の場の外側にいる、観察される対象である。さしあたり、発話の場の外にあって観察される対象は、場において体験を共有しないものと考える[[20]](#endnote-20)。これは、現象描写文と同じ構図であり、「雨が降っている」という場合、話し手、聞き手が同一の発話の場にあり、その外にある現象を観察し描写している。また、指示詞で言うと「こ」と「そ」に対する「あ」の対立である[[21]](#endnote-21)。これはいわゆる、共同注意の構図でもある。

話し手

聞き手

**図19　現象描写文の構図**

場の観点からいうならば、上記の構図は、場内在的かつ事態外在的描写である。たとえば、自分が部屋の中から窓越しに「雨が降っている」という場合である。一方で、同じ現象描写文を、「場外在的（事態外在的）」に描写することもありうる[[22]](#endnote-22)。「雨が降っている」という事態及び場から離れた場所で、それを外在的に描写しているのである場合、たとえばテレビで他の地方で「雨が降っている」のを見ているという状況があげられる。

以上、内的状態述語の人称制限なる議論が疑似問題であり、日本語の主観性の指標であるという議論の問題性を指摘してきたが、その他、「行く」「来る」、「あげる」「くれる」、間接受け身などの現象も、主観性や自己中心性の指標というより、「今、ここの場」にモノ、事態が現れるという「場中心性」から考えるべき現象であると考える。客観的、主観的という対立ではなく、場外在的か場内在的という場を中心とした観点がより、日本語の現象を自然にとらえうると考える。紙面の都合で十分展開できなかった現象について記述を展開し、場の言語学の説明力を実証的に明らかにしていくことは今後の課題である。

**5. 場における事態の生起－フュシスの文法の提案**

　池上（1981）『「する」と「なる」の言語学』では、英語などの欧米言語の多くはスル的表現を基調とし、日本語など多くの言語ではナル的表現を言語の基調とすることを明らかにした。よく誤解されるように、この「なる」は、単に「XがYに変化する」というような、モノの変化を基調としたものではない。ナルは「実がなる」「一大事がなる」ように、「事態の生成」がその根源的スキーマであると考える。ナル的表現は、デキルやラレルなども含め、「場における事態の生起」というスキーマを形成する。「事態の生起」とは「自然の勢い」＝フュシスであり、これを「フュシスの文法」として提案する。

5.1 フュシスの哲学

　古代ギリシアの哲学者、ヘラクレイトスは、万物の真のありかたとして、フュシス（physis）という概念を提案していた。このギリシア語の＜＞という名詞は、＜生える＞＜なる＞＜生成する＞といった、いわば植物的生成の動きを示す動詞＜＞から派生したものだという。ソクラテス以前の自然哲学者にとって、万物は、おのれのうちに内蔵している運動の原理―＜自然（フュシス）＞―によって自ずから生成してきた（そして消滅していく）ものなのであり、＜ある＞ことは＜なる＞ことだった。フュシスは、「自然」と訳されるが、彼らにとって、けっして今日の自然科学が研究対象にしているような物質的自然などではなく、すべての存在者の真のあり方だったのである。（木田2000:185）

　『存在と時間』を書いた現代哲学者のハイデガーは、アリストテレス以来の西洋哲学の根本にある「存在＝被制作性＝現前性」という特殊な存在了解に由来する存在概念の解体を試み、＜存在＝生成＞とみるソクラテス以前の思想家たちの存在概念＝＜自然＞（physis）の概念を対置したという(木田2000)。

この存在を「生成＝自然」とみる考えは、ソクラテス以前のギリシャに限らず、『古事記』の古層に見られるような古代の日本人の考えに近いといわれる。丸山真男は『歴史意識の古層』の中で、日本の歴史意識の古層―基底範疇に「なる」があると主張する。「有機物のおのずからなる発芽・生長・増殖のイメージとしての「なる」が「なりゆく」として歴史意識をも規定していることが、まさに問題なのである。」（丸山1992:309）としている。また、古代語の「ある」は、出生・出現をあらわしたという。まさに、「ある」ことは「なる」ことであったのである。池上（1981）『「する」と「なる」の言語学』の基底にこの丸山の「歴史意識の古層」があったことは池上自身が述べているところである。ここでは、作為としての「する」的発想と自然としての「なる」的発想があり、英語はスル型が優勢であり、日本語はナル型が優勢であるとする。本稿ではその立場を基本的に継承するとともに、ナル型の根底に「アルことはナルこと」という「存在＝生成」という発想があることを指摘する。一方、他動詞構文をベースとしてカテゴリー化される英語などの西洋言語（スル型）の背景には、制作者が材料に働きかけて存在物をうみだすという存在論的理解があり、動作主が対象に働きかけて状態変化したものを生み出すという他動詞構文の構造にメタファー的に写像がおこなわれていると考えることができる。こうした動詞カテゴリーの形成の差異は、存在を生成として捉えるか、被制作性（作られてある）として捉えるかという「存在了解」の差異として存在論的に捉えられるだろう。この＜存在＝被制作性＞と＜存在＝生成＝自然＞という存在了解の差異は、西洋言語と日本語の文法構造のさまざまな差異にも深く反映されていると言えるのではないだろうか。

　フュシスの立場に対して、ロゴスの立場がある[[23]](#endnote-23)という（池田・福岡2017）が、これに対応して、ロゴスの文法に対して、フュシスの文法が構想されるのではないか。以下、日本語の出来文、中動態の文法の考察から、「場における事態の生起」＝「自然の勢い」＝フュシスの文法を展望していきたい。

**5.2 出来文からの考察**

 尾上（1998）では、「ラレル形動詞述語によって実現される日本語本来の受け身文は、事態を個体の動きとして語らず、全体として発生、生起するものとして語る文である」（傍線稿者）、「受け身文とは、動作主の動作として捉えることができる事態をあえてそうしないで、主語を場としてある事態が発生、生起するというような捉え方をする文であり、その特別な捉え方の印として述語動詞がラレル形をとるものである」（傍線稿者）とし、ラレル文全体を「事態全体の出来を語る文（出来文）」と規定した。ただ、尾上は、ナルに関しては、出来文には含めていない。しかし、ナルが、「一大事がなる」「結婚することになる」のように、事態の生起に使われていることを考えると、ナル文を出来文から除外することはないと思われる。多くの言語でナル相当動詞が「主格」あるいは「ゼロ格」をとるということは「事態全体**ガ**生起する」というスキーマを示していると推察される（岡2013）。また、尾上が可能動詞も出来文に含めており、またそもそも「出来」は、「出てくる」ということから来ていると考えると、デキル（中国語を話すことができる」）も出来文に含みうる。このように、ナル的表現を、ナル、ラレル、デキルなどを含め、「事態全体の出来・生起を語る文」として、位置づけることが可能である。

**5.3 中動態からの考察**

　バンヴェニスト（1983）は、「受動態」が生まれる以前の古代ギリシア語に見られる「能動態・中動態」の対立を「外相」と「内相」の対立（主語が過程の外にあるか内にあるか）とした。また、細江逸記（1928）は、「中動態」を「反照性能相」とし、「動作が行為者を去らずその影響は何らかの形式において行為者自身に反照する性質のもの」を表すとし、この「反照」（再帰）から、「受動、自動、自然の勢い」へ機能分化したという。（日本語では、「ゆ・らゆ」「る・らる」から現代の「れる・られる」へと受け継がれる）。國分（2017）では、「自然の勢い」が中動態の根底にあるとし、中動態を、「主語の座として「自然の勢い」が実現される様を指示する表現」（傍線稿者）と定義した。また、金谷（2004）では、バンヴェニスト、細江が主語や行為者を中心として考えることを批判し、「中動相」を「行為者の不在、自然の勢いの表現である」（傍線稿者）とし、中動相の人称語尾は、「行為者ではなく、出来事の場所としての人間」（傍線稿者）であるとしている。

**5.4 フュシスの文法へ**

 以上の考察から、ナル的表現のスキーマとは、「場における事態の出来・生起」を表すスキーマであると考えることができる。西欧文法の「能動態―受動態」の対立、「主格―対格」の対立、「主語・述語」の文法、主語論理、主客分離の立場は、ロゴスの文法の立場であるのに対し、日本語などのナル的表現の文法は、「述語的論理」、「場所の論理」、「主客非分離」を立場とする、フュシスの文法である。フュシスの文法の展開は、フュシスが、ロゴスより根源的であることを明らかにする、場の言語学の根幹をなすものとして、今後展望を持つものである。

**6. 自他分離の言語習得論か「場」における言語習得論か**

　最後の節は、認知言語学に近い言語習得論としてのトマセロの言語習得論の前提となる自他分離的前提を批判し、最近の質的心理学のパラダイムと研究方法を参考にして、場の言語学での研究方法の模索を行う。

**6.1 トマセロの言語習得論と心の理論**

ヒトは、「心の理論」（Theory of Mind）と呼ばれる認知能力を持つ点で、他の霊長類と大きく異なる（Tomasello（1999））。心の理論とは、他の個体を自らと同じような心を持つ主体として理解する能力であり、こうした能力こそがヒトをヒトたらしめているという。そして、幼児の言語習得は、生後 9ヶ月以降に出現する、他者の意図を理解し、他者が第三者的物体に向ける注意を共有する能力、いわゆる「共同注意」（joint attention）を基盤として進行するとトマセロは主張している。「共同注意」が言語獲得の基盤となること自体は支持できるのだが、問題なのは、ヒトの言語習得が、他者の意図を読むという心の理論によって成り立つという前提である。ここでは、自己と他者があらかじめ分離されており、そうした自他分離の立場から他者をどう理解するかという、デカルト以来の自他分離の立場から離れていないのではないかということである。むしろ、自他非分離の中から共感性が生まれ、 それを基盤として、言語が生まれていくという立場が構想されないだろうか。

**6.2 　「共感能力」が心の理論の基盤である**

フランス（2010）は他者の意図を理解したり、他者の視点に立つことは人間だけの特性ではなく、類人猿 やサルでも見られる特性であることを多くの事例で明らかにしている。フランスは、「心の理論」 で見られる現象を「冷たい」視点取得と呼んでいる。なぜなら、それは、他者が何を目にし、何を知っているかをある個体がどう知覚をするかという点だけに注目しており、他者が何を欲し、何を必要とし、どう感じているかは、それほど問題にしないからだとしている。「冷たい視点取得」という能力自体はすばらしいものであるが、他者の状況や感情に関心を向ける別の種類の視点、すなわち 共感こそが重要だとフランスは考える。フランスによれば、共感とは、同種の他の個体の感情や意図などを即座に感じ取り、同一化によって相手を慰めたり、相手と協同行動をとったりする能力である。共感はヒトのように高い認知能力がなくても多くの動物がやすやすと共感能力を持ち、それ を生活に生かしているのである。現代の心理学者の多くが、共感の存在には「心の理論」（視点、 意図など、他の個体の心を読みとる能力）が不可欠と考えているが、フランスは逆に、生物進化に深く根ざした共感能力が、そのような「心の理論」の基盤になっているという逆の発想をしているのである。

**6.3 言語習得と共同性**

言語習得と共同性との観点からは、浜田(1999)が、人は本源的共同性[[24]](#endnote-24)を出発点に、他者との関係性を通して、ことばの世界を敷き写し、「私」という内的世界を形成していくという構図を打ち出している。この本源的共同性は、同型性と相補性の二つに分けられる。同型性とは、二つの身体が出会ったとき、そこで相互に「相手と同じ型をとること」（共鳴動作）であり、相補性は相互に「能動と受動をやりとりすること」（「目があうこと」）である。この目があうという共同性を基盤とし て、ものを一緒に見るという 3 項関係が生まれ、こうした共同注意場面を通して、大人の意味世界 が子供に引き写されていく。さらに、ここから大人と子供が、＜意味するもの（ことば）－意味されるもの（実物）＞を介した 4 項関係の中で、やりとりをすることを通じてことばが引き写されていくというのである。そして、「私」というのは、こうした他者との＜能動－受動＞のやりとりの 中から生まれてきたものであるという。実体としての「私」（自我）というものがまずあって、そこからことばなどのコミュニケーション手段を通して他者との関係が形成されていくという構図とはまさに逆であって、最初にあるのはまず他者との関係性であって、そこから「私」が登場するという。

 また、浜田（2002:231-238）では、心の理論を証明するテストとして考案された「誤った信念」 課題[[25]](#endnote-25)について、「この課題は、自分の世界とは完全に離れたところで描かれた舞台を、ただただ第三者的にみたときの、いわば観客的認知課題でしかない」としている。他者の生きている「もう一つの世界」がもっとも強く意識される場は、そうした観客的な場面ではなく、自分が他者と共に舞台に立ち、他者たちとその生身の身体で相互にやりとりする場面である。「誤った信念」課題とは、 ある信念を「誤った」というときの視点（「観客」的視点）と、ある信念を持って行動していくときの視点（「当事者」として登場する人物の視点）が分離して初めてなり立つ課題であり、視点分離の問題であるとしている。しかし、私たちの生活世界の中では、いわゆる「観客」はいないわけで、誰もがそれぞれに自らの生活世界の舞台に上がり、周囲の他の登場人物たちとのあいだで、互いにやりとりしながら、「共通」と見える世界を作り上げているのである。

トマセロは、共同注意場面では、「子どもは大人が自分に注意を向けるのをモニターすることになると、それによって、自分を外側から見ることになる。それだけでなく、子供は大人の役割も同じ外側の観点から把握するので、総合的に言えば、子供は自分自身を役者の一人として含む全場面 を上空から眺めているようなものである」（トマセロ 2006:134）と言っている。子供が他者の視点を取り得ることが重要だと言うことは否定しないが、果たして、子供がこのような「観客的」視点、いわば「神の視点」を持ち得ることが、ヒトがヒトたるゆえんとして言語獲得の根本的問題であると言えるのであろうか。やはり、トマセロも西洋言語的見方、西洋近代的思考の陥穽に陥っているとは言えないだろうか。 「心の理論」というものは、チョムスキーが言う「普遍文法」のように人間の大脳に実在するモジュールのようなもので、そのようなものが実在するのか、証明されない永遠の仮説にすぎないのではないか[[26]](#endnote-26)。これに対して、フランスがいう共感や、浜田がいう根源的共同性、ハイデガーのいう「共同存在」などにつながる思考法を前提とする言語学が「場の言語学」である。こうした立場からの言語習得、言語進化的研究が今後求められると考えられる。

**6.4　質的心理学のパラダイムと研究法**

言語習得論としては、最近の質的心理学のパラダイムと研究法が、場の言語学と通底した部分があり、参考にできると考えられる。たとえば、 やまだ（2010）は、乳児においては、「我」と「汝」が最初から基本的単位としてあるのではなく、 二人が共存する「ここ」という**心理的場所（トポス）**だけがあり、そこでは、人は個としてあるのではなく、場所の中に溶け込んでいる、（下線とゴシックは稿者）としている。このとき二人の間における情動を媒介にした響き合い、共鳴、相互作用、のような関係を「うたう」間柄としている。そのような関係を基礎にして、生後 9～ 10ヶ月頃に指さしが現れると共に「乳児－もの－人」という三項関係が成立する。これを「並ぶ関係」 としている。ここでは、我と汝が共にあるモノに視点を向ける、注意を共有するというのではなく、同じ「ここ」という場所において、自分が見たものを他者にも見せたいと願い、共鳴し、共感し、響存する、「並ぶ関係」の中から、ことばが生まれるとしている。これからすると、認知言語学を含め、これまでの言語学は「みる」という立場に偏ってきたのではないかと考えられる（ラネカーの視点配列など）。「みる」では、主体と客体は「みるもの」と「みられるもの」という対立関係に置かれるのであり、ここで「うたう」関係を重視するということが非常に興味深く思われる。「場」の観点からいって、「今、ここ」という「場」において、自他が並ぶ関係として響き合うことが、コミュニケーションの本質的あり方であり、それを基盤に言語でのやり取りもあるのだということを確認できると思う。

さらに、やまだ（2013）では、質的心理学は、「主観」「客観」を分ける伝統的心理学のモデルと異なり、関係性や相互作用や文脈性や多様性を重視する「相互作用モデル」に基礎を置き、研究者と研究協力者は、同じ人間としてともに主体性を持ち、人と人は本質的に相互連関し、相互作用する存在であることを前提としている。研究者と研究協力者は、共に文脈（環境・状況・場所）に埋め込まれているので、そこから完全に外へ出ることはできず、普遍的な神の視点で出来事を知ることもできないし、そこで生じる相互作用を完全に操作することもできない。相互作用によって生み出された会話やナラティヴは、客観でも主観でもなく、文脈の中で人と人との間で共同生成されるものである。ここで注目すべきは、質的心理学では、「客観」とともに、「主観」も疑わなければならないとしていることだ。「広義の言語を用いる質的研究では、個人だけの「主観」にとどまることはできない。言語は、社会・文化的な共同世界の中にあり、公共世界を形作るものだからである」としている。認知言語学は、客観主義を批判してきたが、そこで述べられる「主体」「主観」が個人の世界にとどまるものであれば、やはり独我論に陥る危険性はあるのだ。

　また、鯨岡（2015）は、これまでの「客観主義パラダイム」に対し、「接面パラダイム」を対置し、研究方法として「エピソード記述法」を提案している。それによると、客観主義パラダイムとは、観察者が無関与で無色透明であることを前提とし、さらには観察者が研究対象（被験者＝協力者）から距離を取り、研究対象を外側に見て、目に見える研究対象の行動や言動をもっぱら記録するという態度で観察に従事する枠組みである。一方、接面パラダイムとは、関与者は関与者と関与対象とで作る接面の一方の当事者であるということを前提とし、「その接面で何が起こっているか」を関与者自身の身体を通して感じ分ける態度（「間身体的に響き合う」「間主観的に分かる」）で関与観察に従事するという枠組みである。そして、この接面で起こっていることを他の人にわかってもらうために、それをエピソードとして記述しなければならないとしている。それがたった一つの事例であったとしても、その意識体験と意味がその体験の当事者の心の奥底を、あるいは、そのエピソードを読む多数の読み手の心の奥底を強く揺さぶり、「なるほどそうだ、わかる」と得心のいくかたちでの了解をもたらせば、その意識体験は明証的であるといえるとしている。ここで、鯨岡は、こうしたエピソードは、書き手や読み手の「心の池」に投げ入れられた「石」であり、そのことによる波紋はそれぞれの人が感じた意味であるとしている。場の観点からいうならば、この「心の池」とは、書き手、読み手が一つエピソードを通して意味を共有しあう「場」であると考えられるであろう。

　こうした質的心理学のパラダイムと研究方法は、西洋の社会構成主義などの影響を受けつつ、日本独自で紡ぎだしてきたものが多い。場の言語学のパラダイムもこうした刺激を受けつつ、その研究方法を独自に編み出していかなければならないのである。

**7. おわりに―場の言語学の貢献と今後の課題と展望**

　今後の場の言語学の課題の第一は、日本語や英語といった言語だけではなく、様々な言語に適用できる言語学の一般理論として深め、それに見合った実証的研究を積み上げていかなければならないということだ。また、場の言語学を言語教育にどう生かしていくかという問題も大きな課題としてある。これは、単に、文法書をどう書くかとか教授法や評価などの細かいことにとどまらず、そもそも言語教育は何のために必要なのかということを問うものではなくてはならないかと思う。たとえば、英語教育では、「グローバル世界を生き抜くために」ということが盛んに言われるが、結局、これは競争社会で勝ち抜くための英語教育になっているのではないか。場の言語学の科研費研究の「近代社会の問題解決を目指して」という立場からすれば、「競争」ではなく、「共創」をすすめなければならないのであって、言語教育が、多文化共生のために役立つものにならなければならない。そういう点で、複言語複文化主義教育やグローバル市民教育の一環としての言語教育という観点をもたなければならない。そこで、場の観点が必要になってくるのである。「今、ここの場」を原点として、グローバルな場との往還、また根源的な場（西田哲学の無の場所とつながる）との往還が必要である。その実践としての言語教育や異文化間教育を進めていくということが当面の課題となる。

場の言語学は、言語学だけではなく、近代的なパラダイムを根底的に転換する普遍的なパラダイムを提案する。その根幹として、ロゴスによって忘れ去られたフュシスに還ること、主体によって忘れられた場所を復権し、主体と場所の統一を進めていくこと、そして、それをもって近代社会の根本的な問題解決へとつなげることである。言語学の立場からこの一端を担えれば幸いである。

参考文献

池上嘉彦（2004）「言語における＜主観性＞と＜主観性＞の言語的指標(1)」山梨正明他編『認知言語学論考No.3 』ひつじ書房

池上嘉彦（2005）「言語における＜主観性＞と＜主観性＞の言語的指標(2)」山梨正明他編『認知言語学論考No.4 』ひつじ書房

池上嘉彦（2007）『日本語と日本語論』ちくま学芸文庫

池上嘉彦（2011）「日本語と主観性・主体性」澤田治美編『ひつじ意味論講座５　主観性と主体性』ひつじ書房

池田善昭（2014）『近代主観主義の超克―文明の新しいかたち―』晃洋書房

池田善昭・福岡伸一（2017）『福岡伸一、西田哲学を読む』明石書店

井出祥子・櫻井千佳子（2013）「「場」の理論から見た言語」『日本認知言語学会論文集第13巻』日本認知言語学会

上田閑照（1987）『西田幾多郎哲学論集Ⅰ―場所・私と汝』岩波文庫

上原　聡（2016）「ラネカーのsubjectivity理論における「主体性」と「主観性」」中村芳久・上原聡編著『ラネカーの（間）主観性とその展開』開拓社

大塚正之（2013）『場所の哲学―近代法思想の限界を超えて―』晃洋書房

岡　智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房

尾上圭介（1998）「文法を考える5 出来文（1）」『日本語学』17(7):76-83, 明治書院

金谷武洋（2004）『英語にも主語はなかった』講談社

城戸雪照（2003）『場所の哲学』文芸社

鯨岡　峻（2015）「「接面」から見た人間諸科学」小林隆児・西研編著『人間科学におけるエヴィデンスとは何か』新曜社

木田　元（2000）『ハイデガー『存在と時間』の構築』岩波現代文庫

河野秀樹（2013）「「場」における身体性と言語」『日本認知言語学会論文集第13巻』日本認知言語学会

子安増生（2000）『心の理論－心を読む心の科学』岩波書店

國分功一朗（2017）『中動態の世界―意志と責任の考古学』医学書院

佐久間鼎（1966）『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣

澤田治美（2011）「第5巻『主観性と主体性』序論」澤田治美編『ひつじ意味論講座５　主観性と主体性』ひつじ書房

清水　博（2003）『場の思想』東京大学出版会

菅井三実（2003）「概念形成と比喩的思考」辻幸夫編『認知言語学への招待』大修館書店

辻　幸夫編（2013）『新編　認知言語学キーワード事典』研究社

永井　均（2006）『西田幾多郎　＜絶対無とは何か＞』NHK出　　　版

中村芳久（2016）「Langackerの視点構図と（間）主観性」中村芳久・上原聡編著『ラネカーの（間）主観性とその展開』開拓社

鍋島弘治郎（2011）『日本語のメタファー』くろしお出版

浜田寿美男（1999）『「私」とは何か』講談社.

―――――（2002）『身体から表象へ』ミネルヴァ書房.

バンヴェニスト（1983）「思考の範疇と言語の範疇」「動詞の能動態と中動態」「動詞における人称関係の構造」岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』みすず書房

藤田一照・永井均・山下良道（2016）『＜仏教3.0＞を哲学する』春秋社

フランス・ドゥ・ヴァール（2010）『共感の時代へ』紀伊國屋書店.

深田智・仲本康一郎（2008）『概念化と意味の世界』研究社

細江逸記（1928）「我が国語の動詞の相（Voice）を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」『岡倉由三郎退官記念論集』岡倉先生還暦祝賀会発行

本多　啓（2005）『アフォーダンスの認知意味論―生体心理学から見た文法現象』東京大学出版会

町田　章（2016）「認知図式と日本語認知文法―主観性・主体性の問題を通して」山梨正明編『認知言語学論考第13巻』ひつじ書房

松井一美（2010）「日本語母語話者とロシア語母語話者の日本語発話データに見る＜主観的把握＞と＜客観的把握＞」『日本認知言語学会論文集　第10巻』pp107-116

丸山真男（1992）「歴史意識の「古層」」『忠誠と反逆』筑摩書房.

メイナード・泉子（2000）『情意の言語学―「場交渉論」と日本語表現のパトス―』くろしお出版.

三尾　砂（1948）『国語法文章論』（三尾砂著作集Ⅰ、ひつじ書房、2003所収）

やまだようこ（2010）『やまだようこ著作集第 1 巻 ことばの前のことば』新曜社

やまだようこ（2013）「質的心理学の核心」やまだようこ他編『質的心理学ハンドブック』新曜社

Lakoff, George and Johnson, Mark.（1999） *Philosophy in the Flesh*. Basic Books. （レイコフとジョンソン著　計見一雄訳（2004）『肉中の哲学』哲学書房）

Tomasello, Michael(1999)T*he Cultural Origins of Human Cognition. Cambridge*, MA.: Harvard University Press. （大堀壽夫他訳（2006）『心とことばの起源を探る－文化と認知』 勁草書房.）

1. それ以外に、例えば、1960年代以来の社会言語学など様々な流れや立場があるが、あえて、構造言語学―生成文法―認知言語学を主流の言語学の流れと考えた。 [↑](#endnote-ref-1)
2. Langacker (1987) *Foundation of Cognitive Grammar* Vol.1, Lakoff (1987) *Women,Fire,and Dangerous things*, Johnson(1987) *Body in the Mind*.など、認知文法、認知意味論の古典的な文献が出されて、2017年で、30年になる。 [↑](#endnote-ref-2)
3. 生成文法などの論者は、主語が普遍的な文法範疇であると言っているが、認知文法でも、主語は、（節レベルにおいて）プロファイルされた関係における第1の焦点（＝トラジェクター）と規定している。ここから、町田（2016）では、節レベルにおいて、トラジェクターのない文、主語のない文は存在しない。したがって、日本語における主語の省略は、主語が存在しない文という理解ではなく、主語は存在するがそれが言語化（音声化）されていない文だと主張している。主語の問題に関する場の観点からの包括的な議論は、岡（2013）第3章参照。 [↑](#endnote-ref-3)
4. 鍋島（2011）では、メタファーの基盤を共起性（身体性基盤）などで説明している。「怒りは火」などは、怒ると体温が上昇するという経験的基盤があげられる。これも「怒ると熱い」「火は熱い」故に「怒りは火である」という述語的推論が関係する。身体的な基盤が考えられないような抽象的な事象でも、「時間は大切だ」「お金は大切だ」故に「時間はお金だ」など、述語（特徴やイメージ）の同一性、類似性がメタファーの基盤になっていると考えられる。メタファーや比喩の述語論理としての解明は今後の課題である。 [↑](#endnote-ref-4)
5. 「容器」より「場所」のイメージがより通用範囲が広いと思われる。「容器」は、人間が使う道具であり、その中は単に空間である。「場所」は人間が住む、あるいは活動する環境や、概念的場も含むものである。 [↑](#endnote-ref-5)
6. 池田・福岡（2017:46）では、ソクラテス・プラトン以降、二千数百年にわたって、人間の思考は、本当の生（なま）の世界というものに触れるのではなくて、人間の主観性のなかで構成されたものを相手にしてきたにすぎない。すなわち、これまでの哲学や科学は、「主観性の原理」にのっとって営まれてきたのである、としている。池田（2014）では、西洋近代の科学技術における「客観性とは、実は主観性に過ぎなかったのである。この主観性とは、今日「人間中心主義」といわれているが、結局のところ、「超越的主観性」といわれる認識論の立場に他ならない。認知的な構成をもつ自我が自然を支配し、人間のために利用することが人間解放と喧伝されたのだった。」としている。認知言語学も所詮、こうした主観性の原理から脱することはできていないのである。 [↑](#endnote-ref-6)
7. 以下の記述は主に深田・仲本2008による。また、池上（2004、2005）では、それぞれを「客観的把握」と「主観的把握」と呼んでいる。 [↑](#endnote-ref-7)
8. 近代哲学の立場では、神の視点というより、「超越論的主観」という人間の理性に置き換えられていると言っていいだろう。 [↑](#endnote-ref-8)
9. Langackerの認知図式では、必ず概念化者（C）が書かれるが、「私」が言語化されない場合、むしろ、それを見ている概念化者を書かない図式の方が正確である。この図式は、上原（2016）の図６を参考にしている。これは話者の視座で捉えられる見えを表したものとしている。上原はこれを主観性の高い表現といっているが、場の観点からすれば、これを見ている人すべての視界（場）においてとらえられた表現であり、場内在的事態内在的な表現であると言えるだろう。 [↑](#endnote-ref-9)
10. 本多（2005）においては、能力の源泉を個体とその外部の相互作用あるいは個体の内部と外部の区別を廃した環境全体に求める生態心理学の立場に立っている。さらに、「認識の社会構成」「相互行為（複数の人間の共同行為）としての言語行為」という観点に立っている。これらは、質的心理学などがいう「相互作用」モデルとも一致し、認知言語学を独在論から救う試みとして評価できる。しかし、やはり、本多も、「他者の意思は心の理論によって忖度することができるが、本来私秘的なものであるから究極的には不可知のものである」としており、自他分離のパラダイムから逃れられないようである。 [↑](#endnote-ref-10)
11. 雪国の冒頭の文について、これが「ある人物がたまたま持った経験を述べた文ではない」と明確に言っているのは、永井（2006）だけである。「もし強いて「私」という語を使うなら、国境の長いトンネルを抜けると雪国であったという、そのこと自体が「私」なのである。だから経験をする主体は存在しない。西田幾多郎の用語を使うなら、これは主体と客体が分かれる以前の「純粋経験」の描写である。」 [↑](#endnote-ref-11)
12. 「雷鳴が響き渡っている―取り立てて言うなら私において」「取り立てて言わなければ、私など存在しない（無である）。」（永井2006） [↑](#endnote-ref-12)
13. 仏教の考え（藤田・永井・山下2016）では、「本来の自己」とは、個々の身体（自我）を超えた、ぶっつづきの生命である。ここでは、自己と他者はつながっており、主体も客体もない。藤田ら（2016）で、「青空としての私」を主張する山下は、「私」は「青空」であり、「自我」が作り出す「映画」（思い）を眺める主体であるとする。しかし、「私」は主体ではなく「場所」であるとしなければ、誤解を生むだろう。「私」という主体が何かを眺めるという主客分離のパラダイムになってしまうからである。すべてはこの「自己」という場所に映され、生起している出来事なのである。それに「気づき」、「自覚」することが、最近よく言われる「マインドフルネス」の本質ではないか。 [↑](#endnote-ref-13)
14. 「経験するというのは事実其儘に知るの意である。まったく自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粋というのは、普通に経験といっている者もその実は何らかの思想を交えているから、豪も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態をいうのである。たとえば、色を見、音を聞く刹那、未だこれが外物の作用であるとか、我がこれを感じているとかいうような考えのないのみならず、この色、この音は何であるという判断すら加わらない前をいうのである。それで純粋経験とは直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識と其対象が全く合一して居る。これが経験の最醇なるものである。」（「善の研究」『西田幾多郎全集第一巻』岩波書店、1965） [↑](#endnote-ref-14)
15. 「＜環境論的自己＞という概念を成り立たせている視点も、＜主体＞と＜客体＞の対立を超越する契機を与えてくれる。何よりも先ず、自己は環境の中に埋め込まれた存在として捉えられる。環境の中で自らが動く時、環境において起こっていると認識される変化は、他ならぬ我が身に起こっている変化の指標である。（「眼前の壁が自分のほうへ向かってくる」という言語表現）（中略）＜環境＞という概念自体がそこに埋め込まれている自己への関与ということを含意している限り、環境で起こっていることは、とりも直さず、自己において起こっていることでもある。一歩進めば、出来事は環境においてではなく、自己において起こっているのであるということも出来よう。（中略）出来事が出来するのは環境という場所ではなくて、自己という場所においてではないかということである。このような捉え方は、自己と環境とを対立したものとして措定し、自己が環境に対して働きかけ、自らの意に叶うように変えていくという図式とは鮮明に対立する。後者では自己は何かを＜する＞主体である。前者では、自己は何かが出来する－つまり、そこで何かが＜なる＞－場所である。」(池上2007:327‐328、下線稿者)

…もう一歩進んで、踊り手を＜場所＞と捉えるというのはどうであろうか。そこには、踊り手というパフォーマンスを作り出す主体としての踊り手も、その踊り手を自らの身体の一部の如く操る超越的な主体も存在しない。踊り手という場において、踊りという出来事が文字通り出来する―あるいは、実がるように、成る―というだけである。…つまり、今問題にしている場合で言えば、＜行為＞が自然発生する―言い換えれば、＜主体なき行為＞が成る―という認識を伴わなくてはならないわけである。」（同334-335、下線稿者） [↑](#endnote-ref-15)
16. 中村（2016:28-29）は、「「寒い！」は、寒いという感覚の直接的表出であり、経験主体が「寒い」に先行して存在していたり、寒いという状況を、距離をとって眺めていたりはしていない。主体は寒さの感覚と同時に存在し、両者は一体化していて、経験の場を構築している…日本語の「寒い！」という発話の観る側と観られる側との間に距離がなく、相互に内包しあうような認知を捉えることができない。」とラネカーの観る側と観られる側が対峙する主客対峙の構図では、「寒い」のような主客未分の事態を捉えることができないとしている。ここにラネカーの認知文法の限界性があるだろう。また、「「寒い！」はイマ・ココ・わたしに限定されていると思われがちだが、そうではなく、表現に感覚が不可分にくっついていることが重要で、時や場所や誰のものかは無限定なのである。無限定だから（31c）で春樹の寒さに、語り手も共感し、聞き手や読者も共感しやすいということがある。」としている。これは、「寒い」が自他非分離の捉え方をしていることを示しているのではないだろうか。ラネカー式の認知図式ですべての事態をえがけると思うことは幻想であり、ここで場の観点が必要なのである。 [↑](#endnote-ref-16)
17. ミラーニューロンとは、イタリアのリゾラッティらが、マカクザルの運動性ニューロンのあるF5野において、本来ある運動をしているときに発火するニューロンが、他の動物や人間が同じような運動をしているのを見るだけでも発火するという現象に遭遇し、名づけられたものである。これらのニューロンは、人間の神経細胞群にも存在することが明らかにされてきている。「これまでは、一般に、自他が分離していることから出発し、自己に起きて経験したことに基づいて、他者の心理や感情を推測すると考えられてきた。これは「心の理論」と呼ばれている。「心の理論」があるから、他者のことを理解できるのだと考えられてきた。しかし、ミュラーニューロンの発見により、実は、そうではなく、人間はもっと直接的に、自他非分離的に、他者の行為からストレートに他者の心理や感情や痛みを感じ取ることができることが明らかになってきているのである。」大塚（2013:83-87） [↑](#endnote-ref-17)
18. もちろん、他人がナイフで突き刺された時の痛みは、自分は感じることができないだろう。個々の身体は、分離しているからである。それでも、他人の痛みや感情に共感できるのはなぜだろうか。自他分離パラダイムでは、自己が他人の側に立ってみて考えて推論するという説明くらいしかできないだろう。推論と共感は違う。場の共有における自他の相互作用によって共感が生れるのであるが、共感の基盤は、根源的な自他非分離性にある。これは、個々の自我を超えて、「本来の自己」を自覚するということでしか理解しえないものかもしれない。 [↑](#endnote-ref-18)
19. 清水の「自己の卵モデル」では、身体がどう位置づけられるかはっきりしないのであるが、稿者の解釈では、個別的な身体は、まず、黄身の部分と考える。黄身の中の核は、「自己中心的領域の核となる」大脳部分であり、それ以外の身体部分を「局在場」とする。身体自体が場であると捉えることが重要である。そして、その身体的働きが、身体の外にも延長してはたらき、「白身」の部分の「場所的領域」にも広がっていくと考えていいのではないかと思う。 [↑](#endnote-ref-19)
20. 日本語では、1人称対2,3人称の対立が基本構図になっているという池上（2004）の主張に反して、日本語では、話し手と聞き手がいる発話の場の内部とその外部という対立（あえて言えば、1，2人称対3人称）の構図が基本なのではないかと考える。また、池上（2004）は、人間言語がモノローグから始まり、ダイアローグに発展したと考えているが、場の言語学の立場は、場における体験の共有を基盤に言語が形成されるという逆の立場になる。 [↑](#endnote-ref-20)
21. バンヴェニスト(1983)は、1人称・2人称だけが人称であって、3人称は「非人称」であるとしている。また、佐久間(1966)は、人称代名詞は、指示代名詞の「こそあ」と対応していると指摘している。「1人称・2人称」対「3人称（非人称）」の構図は、「こ」と「あ」の対立と並行している。3人称代名詞と、「あ」に当たる指示代名詞が同一の言語がある（クルド語）。 [↑](#endnote-ref-21)
22. ロシア語話者の事態認知を調査した松井(2010)では、共通の絵を見て、日本語母語話者が「二人の子どもたちが遊んでいます」とその場に入り込んで見る描写をするのに対し、ロシア語話者は多くが「この絵では、二人の子供たちは遊んでいます。」のように、事態を場の外から眺める表現をするという。 [↑](#endnote-ref-22)
23. 「ヘラクレイトスによれば、ピュシス（自然）は、「隠れることを好む」とされ、常に隠されている存在なのですが、ロゴスの立場というのは、自然は完全に人間の理性の中で暴かれていて、その隠れなさゆえにすべてが理解し尽くせると考える立場です。人間の理性にとって矛盾して相反するものは、見ることも理解することもできないものであるから問題にする必要がないとして、ヘラクレイトスなどのピュシスの立場から、人間の理性に合致するもの、隠れなく「見えているもの」の原型・模範をのみ探求するロゴスの立場へと哲学が転換するのが、ソクラテス、プラトンの時代です。」（池田・福岡2017:40）ハイデガーはそれに対し、「真の存在はピュシスにあった」と指摘する。「ハイデガーの言う「現存在」（Dasein）とは、まさにいま生まれつつある存在、ありのままに起きている（「生起」的な）存在のことです。リアリティの根拠は何かと言えば、そうした現存在の自然的な「生起」のただ中にあるものであり、ピュシスのうちにこそあるものです。真のリアリティそれ自体が自然の中にある。そのピュシス、自然というものが西洋形而上学」の歴史の中ですっかり忘れられていくわけです。」（同上:43）西田幾多郎は、そのピュシスの世界にもう一度立ち戻って、哲学も科学も作り直そうとしたのである。西田の「自覚」とは、ピュシスに気づくことであり、「純粋経験」とは、ピュシスの世界に入ろうとすることである、としている。 [↑](#endnote-ref-23)
24. 浜田は、身体の個別性からして、人間は本源的に自己中心的であるとしている。一方で、人は最初から身体そのものにおいて本源的に共同的であるとしている。 [↑](#endnote-ref-24)
25. 子安（2000）によれば、「誤った信念課題」とは次のようなものである。最初に、人形劇などで、次のような話を子供に聞かせる。「マクシは、お母さんの買い物袋をあける手伝いをしています。マクシは、後で戻ってきて食べられるように、どこにチョコレートを置いたかをちゃんと覚えています。その後、マクシは遊び場に出かけました。マクシのいない間に、お母さんは、チョコレートが少し必要になりました。お母さんは＜緑＞の戸棚からチョコレートを取り出し、ケーキを作るために少し使いました。それから、お母さんはそれを＜緑＞の戸棚に戻さず、＜青＞の戸棚にしまいました。お母さんは卵を買うためにでていき、マクシはお腹をすかせて遊び場から戻ってきました。」この話を聞かせた後、「マクシは、チョコレートがどこにあると思っているでしょうか？」という質問をする。これに対して、子どもが「＜緑＞の戸棚」を選ぶと、マクシの「誤った信念」を正しく推測できたことになる。この課題に対し、3~4歳児はそのほとんどが正しく答えられず、4~7歳にかけて正解率が上昇するというデータが得られた。これらの研究から「心の理論」の出現の時期がおよそ4歳ごろであるとしている。 [↑](#endnote-ref-25)
26. 「普遍文法」と同じように、「心の理論」も、言語習得を説明する仮説として設定されているものであり、仮説自体を「ない」と証明することは難しいが、ここでは、それらのよって立つパラダイムを問題とし、そのような仮説設定自体の問題性を指摘している。 [↑](#endnote-ref-26)